

2023年

制作：広報部
ワッツアップ

こまつがわ 9月号
題字：宗新光さん

社会福祉法人ひらいるミナル 地域活動支援センターこまつがわ

〒132-0034 東京都江戸川区小松川2-9-2 1階 ☎ 03-5858-6421(代表)



東京新聞掲載記事



今回この場を借りて紹介したい出来事がありました。東京新聞8月10日号に掲載された記事に社会福祉新聞記者の木原さんが、センターこまつがわのメンバーさんの事を書いてくださいました。

それではどうぞ！！

他者の痛みを知る

久しぶりにできた膝小僧のあざ、うっすら日焼けした肌…。おっかなびっくりだった彼(20)の表情が少しずつ「色」を取り戻している。彼は十六歳からずっと自宅にひきこもっていたが、今春から少しずつ外出できるようになった。今回は、そんな彼との会話から。

東京都江戸川区の地域活動支援センター「こまつがわ」。精神障害がある人らが集い、日常をともにする場だ。福祉作業所での仕事帰りに立ち寄る人もいれば、一日中ここで過ごして生活リズムを整える人もいる。

彼とはそのセンターで出会った。週末にボランティアをしていると、いつも昼過ぎに現れ「カウンセリングしてください」と照れ笑いしながら近くに座ってくれてる。少しずつ会話を重ねている。といっても心理職ではないため何か有効なアドバイスができるわけでもなく、ほとんど聞き役だ。

外に出られるようになったが、彼はまだ自分自身を肯定できずにいる。彼の話によると、中学生の頃までは「順調」だったという。成績優秀で、運動も人一倍がんばる努力家。だが次第に力がなくなっていく。高校は有名進学校に入学したが、統合失調症になり中退した。

「がんばろうとすると、もう一人の誰かがもう頑張るなって足を引っ張ってくる。それはよくないって、より頑張ろうとして、また足を引っ張られる。その繰り返しの日々だった。」

家から出られるようになったのは、センターの評判を聞いた父親に連れて来られるようになったから。何か特別なきっかけがあったわけではなかった。最近ではセンターの利用者らと外でバレーボールを楽しめるまでに。ゆるくて自由な雰囲気が心地よいようだ。膝小僧のあざや日焼けした肌を見ると、少し前向きにもなれるという。

彼の話を聞きながら、「大丈夫」「頑張ろうね」とは踏み込まない。ただ、随所に彼がひとり抱えてきた苦しみは伝わる。他者の痛みを知ることは、今と一緒に生きていることにつながると感じている。それは家にこもっていても外に出られるようになっても変わらないことだ。

引きこもりの負のイメージを伴って社会問題として共有されている。だが、人の痛みに鈍感になって生き延びる猛暑より、彼はよほどみずみずしい感性を保っていると思える。彼は今、とても穏やかだ。過去は肯定できずとも、今この瞬間は肯定できる。それでいいのではないだろうか。

(木原育子、随時掲載)